

## 中島敦文学における「他者」

——「実存的懐疑」と「植民地体験」の統一的な理解のために——

板垣 裕之

### はじめに

本稿は、中島敦(1909-42)の「実存的懐疑」と「植民地体験」を統一的に理解することを目的とする。典拠研究を別とすれば、これまで中島敦の作品研究に関しては、大きく二つの流れがあった。

第一に、中島敦の「我」を読み解こうとするものである。そのような研究は多くの場合、作品中にあらわれる主要な登場人物が形而上学的な問いに懊悩するさまを、中島敦の個人の煩悶と同一視し、それこそが中島文学の核心であるとしてきた。このような方向からの研究の代表的なものに、中村光夫「中島敦論」<sup>(1)</sup>、勝又浩『我を求めて——中島敦と私小説』<sup>(2)</sup>がある。

第二の流れは、中島敦を植民地体験から理解しようとする。中島敦は京城、大連、パオオで生活した経験があり、それらの土地を舞台とした作品を残している。「我」に着目した研究では比較的軽く扱われがちであったこれらの作品を、ポスト・コロニアリズムやオリエンタリズムの視点も踏まえて分析する方向でなされた研究である。早い時期においては、川村湊『アジアという鏡』<sup>(3)</sup>が広く東アジアの文脈で中島を読もうとする著作として挙げられる。近年では、木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』<sup>(4)</sup>、杉岡歩美「中島敦〈南洋もの〉考——〈南洋〉表象と「作家」イメージ」<sup>(5)</sup>、西原大輔「中島敦「李陵」「弟子」と南洋植民地」<sup>(6)</sup>などもこの方向の研究として挙げられよう。

このように中島文学に関する先行研究を踏まえると、三浦徳高「中島敦研究における課題」<sup>(7)</sup>に見える以下の指摘は、今後の中島研究を考える上で重要であると思われる。

(前略) 中島の同時代への眼差し、そして作者中島自身を彷彿とさせる主観的懊悩に囚われる人物。これらの接続点はどこにあるのか。それを探ることが、今後の中島敦研究の指針となるであろう。<sup>(8)</sup>

三浦は上記の論文で、このような視座で中島研究を行う際に、「作中に描かれた中島本人の投影と目される登場人物を相対化する視点」<sup>(9)</sup>の重要性を説く。つまり「我」ではない視座から、中島文学を読み解く試みが中島研究を深化させると指摘する。すなわちこれは、作品の中に書きこまれた時代の表象に対する分析と、中島文学に描かれる「我」とを統一的に捉えることによって、中島研究は深化するという見通しを示しているのである。

本稿は、上記のような中島研究の歴史と課題を踏まえ、中島文学を「他者」という視座から読むことを通して、それに一定の応答を試みようとするものである。

## 一 中島敦文学における「我」

本節では、中島が描いた「他者」を考察する前段階として、中島の描いた「我」を踏まえたい。前節で紹介した三浦の議論を受けて述べるならば、中島文学を読むにあたって、なぜ「他者」という視座を取ることが、「中島＝登場人物」という視座を相対化することにつながるのか。それを明らかにすることが本節の目的である。

「我」に執着した人物が描かれる代表的な作品として、「狼疾記」<sup>(10)</sup>がある。「狼疾」とは、『孟子』「告子章句」上14に見える次の言葉による。

養其一指，而失其肩背而不知也，則為狼疾人也。

(其の一指を養ひ、而も其の肩背を失つて知らざれば、則ち狼疾の人と為らん。)<sup>(11)</sup>

「狼疾記」において「狼疾」という言葉は、世界の一部に対する懷疑を肥大化させてしまい、世界の全体像を得ることができず、その結果、生を破綻させてしまうという意味で用いられている。また、佐々木充は中島の「狼疾」に関して次のように述べている。

中島の文学の基本に流れているのは、やはり〈実存〉への深い関心なのであり、「狼疾」とはまさに、そうしたものへの〈観念〉の中国古典の語を借りての中島的表現と考えねばならないだろう。<sup>(12)</sup>

副題にも挙げた「実存的懷疑」という語を、本稿では、上記のような文脈を受けて用いることとする。つまり、本稿における「実存的懷疑」とは、「自分と他人が取り換え可能なのではないか」という存在の不確かさに対する懷疑や、「自己とは何か」「世界の究極の意味とは何か」といった懷疑である。そして、それは中島文学に通底して見られるモチーフである。

本節で考察する「狼疾記」も、実存的懷疑に取りつかれたために、生そのものを破綻させてしまうという倒錯的な人物造形が見てとれる作品である。本作品では、主な登場人物である三造の「視線」が印象的に用いられている。洋食屋に入った三造は、ひとりの男と出会う。

料理を卓に置いて給仕が立去つた時、二つ卓を隔てた向ふに一人の男の食事をしてゐるのが目に入った。其の男の(彼は此方に左の横顔を見せてゐた)頸のつけねの所に

奇妙な赤つちやけた色のものが盛上つてゐる。余りに大きく、又余りに逞しく光つてゐるので、最初は錯覚かとよく見定めて見たが、確かに、それは大きな瘤に違ひなかつた。テラテラ光つた拳大の肉塊が襟カフターと耳との間に盛上つてゐる。此の男の横顔や首のあたりの・赤黒く汚れて毛穴の見える皮膚とは、まるで違つて、洗ひ立ての熟したトマトの皮の様に張切つた銅赤色の光である。この男の意志を蹂躪し、彼からは全然独立した・意地の悪い存在のやうに、その濃紺の背広の襟カフターと短く刈込んだ粗い頭髪との間に蟠踞した肉塊——宿主の眠つてゐる時でも、それだけは秘かに目覚めて晒つてゐるやうな・醜い執拗な寄生者の姿が、何かしら三造に、希臘悲劇に出て来る意地の悪い神々のことを考へさせた。かういふ時、彼は何時も、会体の知れない不快と不安とを以て、人間の自由意志の働き得る範囲の狭さ（或ひは無さ）を思はない訳に行かない。俺達は、俺達の意志でない或る何か訳の分らぬもののために生れて来る。俺達は其の同じ不可知なもののために死んで行く。<sup>(13)</sup>

三造の、男の瘤へ向ける視線は執拗である。三造の視線は「其の男」の細部にまで達しているために、男の全体像を取り結ぶことができない。顕微鏡で小さなものを何百倍にも拡大して見るように、男の瘤が異常なほどにクローズ・アップされているが、それゆえに男の全体像は見えてこない。本作品において、細部への着目と全体像の喪失は表裏一体である。さらに、執拗な「視線」が存在の不確かさに対する三造の実存的懷疑の引き金になっている。

見るばかりで決して見られることがないのが三造ただ一人であるのと同様に、懷疑することのできる存在も三造ただ一人である。三造から見れば、彼と同じように懷疑できる存在はどこにもない。三造から見える世界に、三造同様に懷疑する「他者」は存在しない。このような存在の不確かさに対する三造の感覚は、本作品の冒頭にも表現されている。

スクリーンの上では南洋土人の生活の実写がうつされてゐた。眼の細い・唇の厚い・鼻のつぶれた土人の女達が、腰に一寸布片を捲いただけで、乳房をぶらぶらさせながら、前に置いた皿のやうなものの中から、何か頻りにつまんで喰べてゐる。米の飯らしい。丸裸の男の児が駈けて来る。彼も急いで其の米をつまんで口に入れる。ロ一杯頬張りながら眩しさうに此方へ向けた顔には、眼の上と口の周囲とに膿み爛れた腫物が出来てゐる。男の児は又向ふをむいて喰べ始める。(中略)

見てゐる中に、三造は、久しく忘れてゐた或る奇妙な不安が、何時の間にか又彼の中に忍び込んで来てゐるのを感じた。

久しい以前のことである。其の頃に三造は斯ういふものを——原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、其の写真を見たりする度に、自分も彼等の一人として生れて来ることは出来なかつたものだらうかと考へたものであつた。<sup>(14)</sup>

三造は、見ることのみが可能で、自分は決して見られることがない。見る者と見られる者との間にあるのは、非対称な関係である。見られる者は、見る者の懷疑に奉仕する関係に置かれている。「狼疾記」では、「スクリーン」という機器を通して「南洋土人」を描写することによって、視覚を通して見るだけの者としての「三造」を成立させている。ここにおいても三造は、見ることから懷疑を引き起こし、自分と「土人」は取り換え可能なのではないかという存在の不確かさを自覚するという思考をたどっている。

三造の思考の対象とされているのは、このように「我」の「存在の不確かさ」である。「他者」は三造の思考の対象とはなっていない。このような三造の意識のあり方は、例えば次のような文章にも見てとれる。

所で、今、河岸に沿うて歩きながら、珍しくも、三造の中にある貧弱な常識家が、彼自身の斯うした馬鹿々々しい非常識を晒い、<sup>いまし</sup>警めてゐる。「冗談ぢやない。いゝ年をして、まだそんな下らない事を考へてゐるのか。もつと重大な、もつと直接な問題が沢山あるぢやないか。何といふ非現実的な・取るに足らぬ・贅沢な愚かさに耽つてゐるのだ。それは既に人々が夙うの昔に卒業して了つた事柄——或いは余り馬鹿げ切つてゐるので、てんで初めから相手にしない事柄の一つではないか？ 少しは恥づかしく思ふがいい。」「本当に人々は最早この問題を卒業してゐるのだらうか？」と彼の中にある、もう一人が反問する。<sup>(15)</sup>

上記引用箇所には「三造」、「三造の中にある貧弱な常識家」、「彼の中にある、もう一人」の三者があらわれる。三者の中で交わされる会話も、現実的には三造一人の内部においてのことである。三造の他者との交流は、三造の内部で閉じている。このように三造の実存的懷疑は、「他者」の存在を疎外することによって成立している。

中島研究において、実存的懷疑によって内面に閉じ、他者を疎外した「我」を、作者である中島と二重写しにした議論がなされてきたのは、前節で述べたとおりである。「作中に描かれた中島本人の投影と目される登場人物を相対化する視点」を獲得するためには、「我」から疎外された「他者」が重要となろう。「他者」がいかかに中島文学で表象されてきたのかを次節以降考察する。

## 二 「虎狩」における「他者」

前節においては、「狼疾記」での視線と語りに着目し、三造の意識が自己の中に閉じており、それゆえに三造にとって「他者」が現前しないことを指摘した。

本節は、中島の京城での体験が色濃く反映している「虎狩」<sup>(16)</sup>を取り上げることで、中

島文学における「他者」について考えたい。

「虎狩」は中島の植民地体験を論じる上で取り上げられることのある作品である。中島の植民地体験を、いわゆるポスト・コロニアリズムやオリエンタリズムの観点から分析する場合、朝鮮半島やパラオといった植民地社会における「他者」の描き方が主要な考察の対象となってきた。その考察の仕方は、作品中の自他の区別や、大日本帝国と植民地との関係に注目し、その関係が孕む政治性を論じるという方向性が多かった。

中島の植民地表象の政治性そのものではなく、実存的懷疑と植民地体験を統一的に捉える方途を探るといふ本稿の意図からは、植民地を舞台にした作品に描かれた「他者」と、中島文学に通底して見られる実存的懷疑との関係に絞って議論を進めたい。

京城で学ぶ「中山」という名を持つ「私」は、日本人の子どもでありながら、他の日本人の生徒とは少し違う。「私」は「内地」からの転校生である。「私」は異なる習慣の中で他人の目を気にし、おどおどした委縮した気持ちになる。日本人の生徒が圧倒的に多い京城の中学校でともに学ぶ朝鮮人の生徒・趙大煥は、「私」が転入当初に感じていたのと同じような居心地の悪さを常に感じていた相手であった。

本作品は、「私」と趙との関係を軸に展開する。具体的なテキストを踏まえながら、本作品での中島における「他者」を考えたい。「私」と趙の間では、幾重にも反射する合わせ鏡のような意識のあり方が見てとれる。

私は相手に、自分が半島人だといふ意識を持たせないやうに——これは此の時ばかりではなく、その後一緒に遊ぶやうになつてからもずっと——努めて気を遣つたのだ。が、その心遣ひは無用であつたやうに見えた。といふのは、趙の方は自分で一向それを気にしてゐないらしかつたからだ。現に自ら進んで私にその名を名乗つた所から見ても、彼がそれを気に掛けてゐないことは解ると私は考へた。併し実際は、これは、私の思ひ違ひであつたことが解つた。趙は実は此の点を——自分が半島人であるといふことよりも、自分の友人達がそのことを何時も意識して、恩惠的に自分と遊んでくれてゐるのだ、といふことを非常に気にしてゐたのだ。時には、彼にさういふ意識を持たせまいとする、教師や私達の心遣ひまでが、彼を救ひやうもなく不機嫌にした。つまり彼は自ら其の事にこだはつてゐるからこそ、逆に態度の上では、少しもそれに拘泥してゐない様子を見せ、ことさらに自分の名を名乗つたりなどしたのだ。が、この事が私に解つたのは、もつとずっと後になつてからのことだ。<sup>(17)</sup>

「私」は、趙に「半島人」であるということで、劣等感やコンプレックスを持たせないやうにしている。趙は友人がこのように自分に対して恩惠的にふるまう、つまり「半島人」であることを意識させないように気を遣うことで、かえって救いようもなく不機嫌な気持ちになる。

「私」は趙が不機嫌になる理由を、「半島人」であることに拘泥しているからだと考える。自分が「半島人」であることに拘泥しているからこそ、そのことを見抜かれてはさらにみじめであるから、趙はあえて自ら進んで「半島人」であることを開示したと「私」は捉える。

だが、上記引用箇所はすべて「私」の視点を通して描かれていることに注意したい。事実として描かれているのは、趙が名前を自分から「私」に教えたということだけである。その背後にある理由や感情は、必ずしも趙本人のそれを示しているわけではなく、「私」の判断を示しているに過ぎない。

したがって、上記引用箇所からは「私」が、趙が「半島人」であることを前提として読むことが読みとれる。趙を個人としては見ずに、「半島人」というカテゴリーからのみ捉えようとする描写には、本作品が描き出そうとした差別意識の存在などを見てとることもできるであろう。本稿の主旨である「他者」の表象の観点からは、回想の中で、合わせ鏡のように反射する「私」の意識を介して趙を作品中に登場させるという構造は、趙を「私」にとつての「他者」としては現出させていない。前節で考察した「狼疾記」とも類似する「我」の意識の構造の中で、趙を「見たいように見る」ことが可能となっている。

この「虎狩」という物語では、日本人である「私」が「半島人」である趙をどのように捉え、どのように関係を結ぶかが重要である。

中学三年生の冬に趙大煥は上級生とトラブルを起こし、あわや殴られそうになった。そのとき趙は、「自分は決して彼等を恐れてはゐないし、又、殴られることをこはいとも思つてゐないのだが、それにも拘らず、彼等の前に出ると顫へる。何を馬鹿な、とは思つても、自然に身体が小刻みに顫へ出してくるのだが、一体これはどうした事だらう」<sup>(18)</sup> と、「私」に話す。

頭では恐れてはいないのだが、実際の暴力を前にして身体がふるえてしまう。頭の上では、上級生や日本人に対する「追従」に憤っていても、身体的なレベルではやはり「追従」してしまう。

彼は何時も人を小馬鹿にしたやうな笑ひを浮かべ、人から見すかされまいと常に身構へしてゐるくせに、時として、ひよいとこんな正直な所を白状して見せるのだ。<sup>(19)</sup>

このような趙の苦悩も「私」からしてみれば、「正直な所」と一括されてしまう。「私」にとつて「正直」と捉えられているのは、下級生が上級生の暴力に対して、憤りなどから反発することではなく、強い者を前にして否応なく抱いてしまう身体的な恐れを自覚することである。そして、この背後にあるのは、上級生は強い、暴力を持つ者は怖いという、趙には「卑屈な追従」<sup>(20)</sup> と呼ばれる態度である。続けて趙は「どういふことなんだらうなあ。一体、強いとか、弱いとか、いふことは」<sup>(21)</sup> と私に語りかける。

その時私はハツと気が付いたやうに思つた——たゞ現在の彼一個の場合についての感慨ばかりではないのではなからうか、と其の時、私はさう思つたのだ。勿論、今から考へて見ると、これは私の思ひすごしであつたかも知れない。早熟とはいへ、たかが中学三年生の言葉に、そんな意味まで考へようとしたのは、どうやら彼を買破りすぎてみたやうにも思へる。が、常々自分の生れのことなどを気にしないやうに見せながら、実は非常に気にしてゐた趙のことではあり、又、上級生に苛められる理由の一部をもその点に自ら帰してゐたらしい彼を、よく知つてゐた私であつたから、私がその時そんな風に考へたのも、あながち無理ではなかつたのだ。さう考へて、さて、自分と並んだ趙のしをれた姿を見ると、さうでなくても慰めの言葉に窮してゐた私は、更に何と言葉をかけていいやら解らなくなり、ただ黙つて水面を眺めるばかりだつた。が、それでも私は何かしら心の中で嬉しかつた。あの皮肉屋の、気取屋の趙が、いつもの外出行きをすっかり脱いで——前にも言つたやうに、これ迄にも時として、さういふ事もないではなかつたが、今夜のやうな正直な激しさで私を驚かせたことはなかつた。——裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の、彼を見せてくれたことが、私に満足を与へたのだつた。<sup>(22)</sup>

「裸の」趙とは、「内地人ではない、半島人の」趙であるという等式が、「私」の中では成り立っている。小説中には、日頃、日鮮融和を説きながら、息子が趙大煥と交際することを好まない「私」の父や、半島人であるために趙大煥を苛めているらしい上級生などが登場する。彼らに比べれば、「私」の趙に対する態度は、「どういふことなんだらうなあ。一体、強いとか、弱いとか、いふことは」と、差別には絶対の根拠がないことを感じている趙に寄り添おうとする態度と読むこともできる。

しかし、語り手である「私」は、趙の本質を「半島人」とであると定める態度を崩さない。「外出行き」の服の下に隠れているとされる「半島人」である彼の本質を見取ることが、私に満足を与えている。「私」の内部の「半島人」というカテゴリーに位置づけられることで満足を与えるものとされる趙は、やはり「私」の自我に従属している存在であることは言うまでもない。

### 三 「雞」における「他者」

前節では、「虎狩」における「他者」表象が、趙を「半島人」と同定することの上に成り立っており、「狼疾記」とも類似する「我」の意識の構造の中で、趙を「見たいように見る」ことが可能となっていることを指摘した。

本節では「南島譚」中の一編である「雞」<sup>(23)</sup>を考察の対象とし、「虎狩」とは異なる「他

者」表象のありかたを中島文学の中に探ってみたい。

中島敦は学生時代に京城と大連での生活を経験した。長じて、さらにパラオで生活した経験がある。彼はそこでも小説を書いた。「南洋もの」とでも言うべき一連の作品である。

「雞」は、「私」と「マルクーブ」という名の老人をめぐって展開する。マルクーブは、「<sup>せむし</sup>僵僕」で咳こみがちで、顔を心もち上に向けて、目の前まで垂れ下がった臉を持ちあげなければ相手の顔を見ることができない。一見「哀れ」で「愚鈍さうな」<sup>(24)</sup>人物である。パラオの民芸品の収集に凝っていた「私」は、この老人にパラオの魔除けや祭祀用器具などを作らせては買い取っていた。だが、次第に、パラオの老爺マルクーブは、値段を釣り上げていく。値段を釣り上げるばかりか、次第に手を抜いた粗悪品を作ってくるようになる。「私」が「哀れ」で「愚鈍さうな」と感じた老人に、まんまとしてやられるという展開となる。

「私」はマルクーブのこのような態度に対して、彼を怒鳴りつけてしまう。「私」に叱りつけられた後、マルクーブ老人は、「私」にとって非常に不思議な態度をとる。

(前略) 暫くしてひよいと気が付くと、老人は何時か石の様な無表情さになつてをり、私の声も聞かなければ私の存在をも認めてみない様子である。先程述べたあの不思議な状態、凡ての感覚に蓋をした・外界との完全な絶縁状態に陥つてみたのである。私は驚いたが今更急に折れて機嫌をとる訳にも行かない。それに今となつては、何を言はうが何をしようが、凡てを閉ぢ円くなつて武装した穿山甲<sup>アルマジロ</sup>の様に、彼は何ものをも知覚しないであらう。

沈黙の半時間の後、ふと我に返つたやうに老人は身を動かし、すうつと私の部屋から出て行つた。<sup>(25)</sup>

このマルクーブの態度と、それを見る「私」の視線は、前節で述べた「虎狩」とは対照的である。マルクーブは「私」とは完全に交渉の絶たれた存在として描かれている。確かにもともとマルクーブ老人と「私」は、それほど濃密に、そしてなめらかにコミュニケーションをとる関係として描かれてはいなかった。より高い値で製作品を買い取ってほしいときにも、マルクーブは「私」に向かって左手を出し、右手で臉を上げ下げするだけであつた。それがマルクーブ老人と「私」のコミュニケーションであつたが、この場面ではマルクーブは「私」の思考にとっては理解不能の「他者」として存在している。

「雞」において、「私」はマルクーブの側から世界を想像してみるなど思いもよらない。マルクーブという一人のパラオ人の不可解さの前にただ立ち尽くすのみである。このような態度は、「虎狩」において、趙の側に立とうとする「私」の想像力が、結局のところ「裸の趙大煥」と「弱虫の趙大煥」と「内地人ではなく半島人の趙大煥」を素朴に等号関係に置くことで、「私」に内的な満足を与えるものとしていた態度からは遠くにある。

はじめから「私」の想像力の射程の彼方に存在し、「私」と全く異質な存在として描かれるマルクーブというパラオの老人の存在は、「虎狩」で見られたような表象を拒否すると同時に、一方で「私」とマルクーブとの間に、何らかの本質的な違いと、それによって引かれる境界線の存在を認めることにもつながっている。

「凡ての感覚に蓋をした・外界との完全な絶縁状態」となり、「凡てを閉じ円くなつて武装した穿山甲」のようになったマルクーブと「私」とのその後を簡単に見ておこう。

「私」がきつくマルクーブを叱責した後、マルクーブは、「私」の懐中時計を盗んで去ってしまう。2年以上の歳月が過ぎると、マルクーブが「私」のもとにひょっこり姿を現す。そのとき、彼は不治の病に冒されていた。それまで通っていたパラオ病院をやめて、医学に通じたドイツ人宣教師のもとに見てもらいに行きたいのだという。そして、「私」にパラオ病院に通うのを辞めても院長たちに怒られないように、うまく取り計らってくれないかと頼んできた。病院に通うのをやめたところで怒られはしないだろうと「私」は笑ったが、彼の望むようにしてやった。やがて、不治の病に侵されていた彼は死んだ。マルクーブとの再会から3カ月余り経ったころ、パラオ人の青年が、たてつけに、雞を持ってきた。マルクーブは自分が死んだら、「私」に雞を渡すように取り計らっておいたのだろう。それも、一人に頼んだのでは盗まれる可能性があるから、用心深く3人に頼んだのだ。しかし彼はなぜそのようなことを頼んだのだろうか。「私」が病院通いをやめても怒られないように取り計らってやったからだろうか。過去に「私」の懐中時計を盗んだことに対する償いだろうか。「私」には分からない。ありきたりの説明で「私」を満足させることはできない。

次に引用するのは、上に書いたようなマルクーブとのやり取りを経た後に「私」が抱く感慨である。

人間は死ぬ時には善良になるものだ、とか、人間の性情は一定不変のものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ、とかいふ説明は、私を殆ど満足させない。その不満は、実際にあの爺さんの声、風貌、動作の一つ一つを知りつくして、さて最後に、それ等からは、凡そ期待されない此の三羽の牝雞にぶつかつた私一人だけの感ずるものなのかも知れない。さうして恐らくは、「人間は」といふのではなしに、「南海の人間は」といふ説明を私は求めてゐるのもであらう。それは兎も角として、南海の人間はまだまだ私などにはどれ程も分つてゐないのだといふ感を一入深くしたことであつた。<sup>(26)</sup>

ここでは「南海の人間」というカテゴリーが設置されている。「私」とマルクーブを同じ人間というカテゴリーの中で考えずに、マルクーブを「私」とは異なる「南海の人間」というカテゴリーの中で考えようとしている。それは「私」とマルクーブとの間に境界線を引くことに他ならない。

このような他者は、「虎狩」においてそうであったような、ある種の植民地主義的な意識を反映した表象の対象となってもいない。「狼疾記」にあらわれる「南洋土人」のように、思索の対象として奉仕することしか許されていない他者でもない。マルクーブは「私」の意識や視線に従属してはいない。

「雞」における「私」の「他者」に対する態度は、「狼疾記」に見られるものとは大きく異なり、懷疑によって自らのうちに真実を見つけようとする態度ではない。「狼疾記」の三造にとっては、「南洋土人」はスクリーン上で見ただけのものであり、三造の思考の対象であった。マルクーブという一人の老翁との関わりの中で、「私」は人間をどのように考えるのかについての変更まで迫られようとしている。

「私」は、マルクーブという存在に出会い、「人間」は何なのかではなく「南洋の人間」は何なのかという説明を求める。それは「私」とマルクーブとの間に乗り越え難い境界線を厳然と引くことを意味しているが、一方で「私」の意識や視線によって内部に回収することのできない「他者」としてのマルクーブの存在を認めていることでもある。

#### 四 「悟浄出世」における「他者」と「行為」

前節では、中島が南洋体験を受けて書いた「雞」を考察することで、中島文学における「他者」の捉え方を見て来た。「雞」では、「虎狩」とは異なり、「我」に従属するのではない「他者」の存在の仕方が見てとれる。

本節では、パラオからの帰国（1942年3月17日）後に脱稿したと推定されている「悟浄出世」<sup>(27)</sup>を主な題材に、中島文学における実存的懷疑と、「他者」との関係をさらに考えたい。

「悟浄出世」に関する先行研究は、主に三つの観点からなされてきた。第一に、中島文学の実存的懷疑を本作品中でどのように理解するのかという観点である<sup>(28)</sup>。第二に、本作品を戦争との関係からどのように読むかという観点である<sup>(29)</sup>。第三に、本作品の典拠を探るという観点である<sup>(30)</sup>。

本節の「悟浄出世」についての理解は次の通りである。「悟浄出世」では、「実存的懷疑」から「行為」への移行が見てとれる。その移行には、自分の意識に回収できない「他者」が重要な役割を果たしていると捉える。本作品の冒頭では、悟浄の抱く実存的懷疑が提示される。

其の頃流沙河の河底に栖んでをつた妖怪ぼけものの総数凡そ一万三千、中で、渠かればかり心弱きは無かつた。渠かれに言はせると、自分は今迄に九人の僧侶くを咬つた罰で、其等九人の骸しやれかうべ 願まほりが自分の頸の周囲について離れないのださうだが、他の妖怪等ぼけものには誰にもそんな骸しやれかうべ 願おまへは見えなかつた。「見えない。それは爾おまへの気の迷だ」と言ふと、渠かれは信じ難げ

な眼で、一同を見返し、さて、それから、何故自分は斯うみんなと違ふんだらうといった風な悲しげな表情に沈むのである。(中略) 又彼等は渠に綽名して、独言悟浄と呼んだ。渠が常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔に苛まれ、心の中で反芻される其の哀しい自己苛責が、つい独り言となつて洩れるが故である。遠方から見ると小さな泡が渠の口から出てゐるに過ぎないような時でも、実は彼が微かな声で呟いてゐるのである。<sup>(31)</sup>

注目したいのは、悟浄の「視線」である。悟浄の実存的懷疑を浮き彫りにして、その懷疑が他の誰とも共有できない懷疑であることを示すのは、「狼疾記」と同様、「視線」である。悟浄にはいままでに食べた九人の僧侶の骸顛がありありと見える。だが、他の妖怪には全く見えない。これはひとり悟浄のみが見ることのできる立場にいると解してよいだろう。また、「独言」悟浄と呼ばれ、悟浄の言葉が具体的な「他者」へと向かつていかないことも、「狼疾記」の「三造」と類似している。

悟浄の「病」の特徴は、「何故？」を問うことである。そしてその「何故？」は、私たちが知ることのできない究極の「何故？」である。そして、その「何故？」を問う傾向が強まると、「自分」に疑いをもちだす。

当時は、妖怪に限らず、あらゆる生ものは凡て何かの生れかほりと信じられてをつた。悟浄が曾て天上界で靈霄殿の捲簾大将を勤めてをつたとは、此の河底で誰言はぬ者も無い。(中略) が、実をいへば、凡ての妖怪の中で渠一人はひそかに、生れかほりの説に疑をもつてをつた。天上界で五百年前に捲簾大将をしてをつた者が今の俺になつたのだとして、さて、其の昔の捲簾大将と今の此の俺とが同じものだといつていゝのだらうか？ 第一、俺は昔の天上界のことを何一つ記憶してはをらぬ。其の記憶以前の捲簾大将と俺と、何処が同じなのだ。身体が同じなのだらうか？ それとも魂が、だらうか？ ところで、一体、魂とは何だ？<sup>(32)</sup>

ここに、「狼疾記」の三造と同様の実存的懷疑を見てとることは不自然ではない。三造も悟浄も「私」が私以外の「他者」と交換可能なのではないかと疑いだしているという点で共通である。違いは、「悟浄出世」においては、そのような意識からの脱出がはかられていることである。

「狼疾記」に見られた認識のありかたを、他者を疎外し「我」のみで閉じられた世界の下で特権的に懷疑する認識と表現するならば、「悟浄出世」の第五章であられる、もはや別人となった悟浄の認識のありかたは、「他者」の存在を引き受けた認識のありかたである。

のろまで愚図の悟浄のことゆゑ、翻然大悟とか、大活現前とか云つた鮮やかな芸当

を見せることは出来なかつたが、徐々に、目に見えぬ変化が渠の上に働いて来たやうである。

はじめ、それは賭をするやうな気持であつた。一つの選択が許される場合、一つの途が永遠の泥濘であり、他の途が陰しくはあつても或ひは救はれるかも知れぬのだとすれば、誰も後の途を選ぶにきまつてゐる。それなのに何故躊躇してゐたのか。そこで渠は初めて、自分の考え方の中にあつた卑しい功利的なものに気付いた。(中略) 女傭氏の許に滞在してゐる間に、しかし、渠の気持も、次第に一つの方向へ追詰められて来た。初めは追詰められたものが、しまひには自ら進んで動き出すものに変らうとして来た。自分は今迄自己の幸福を求めて来たのではなく、世界の意味を尋ねて来たとして自分では思つてゐたが、それはとんでもない間違ひで、実は、さういふ変つた形式の下に、最も執念深く自己の幸福を探してゐたのだといふことが、悟浄に解りかけて来た。自分は、そんな世界の意味を云々する程大した生きものでないことを、渠は、卑下感を以てなく、安らかな満足感を以て感じるやうになつた。そして、そんな生意気をいふ前に、とにかく、自分でもまだ知らないであるに違ひない自己を試み展開して見ようといふ勇気が出て来た。躊躇する前に試みよう。結果の成否は考へずに、唯、試みるために全力を挙げて試みよう。決定的な失敗に帰したつていゝのだ。今迄は何時も、失敗への危惧から努力を抛棄してゐた渠が、骨折損を厭はない所に迄昇華されて来たのである。<sup>(33)</sup>

悟浄は、「自己とは何か」、「世界の究極的な意味とは何か」といった実存的懐疑を抱き、まるで計算問題に解を与えるかのように、思索による解決を図ろうとしてきた。そのために、流沙河の底の妖怪たちの間を遍歴する。その試みの挫折を経て悟浄は、「他者」に開かれてくる。「骨折損を厭はない所に迄昇華されて来た」心境の中で、悟浄には実存的懐疑から行為への移行が見てとれる。

寐たのでもなく、さりとて覚めてゐたのでもない。悟浄は、魂が甘く疼くやうな気持で茫然と永い間其処に蹲つていた。その中に、渠は奇妙な、夢とも幻ともつかない世界にはひつて行つた。(中略)

覚えず頭を垂れた悟浄の耳に、美しい女性的な声——妙音といふか、梵音といふか、海潮音といふか——が響いて来た。<sup>(34)</sup>

悟浄は、細部を分析的に見る従来の思考とは全く違う精神状態に入る。このような忘我の状態の中で、三蔵法師のもとで具体的な働きにうちこむべきだと諭すのは観音菩薩である。「悟浄よ。先づふさはしき場所に身を置き、ふさはしき働きに身を打込め。身の程知らぬ『何故』は向後一切打捨てることぢや。之をよそにして、爾の救ひは無いぞ」<sup>(35)</sup> という

響きの中で、悟浄は一種の宗教的な救いを得る。

その救いとは、実存的懷疑を捨て、「行為」へと向かうべきであると説く。ここに見られる「行為」とは何か。ここで「悟浄出世」との連作として作られた「悟浄歎異」<sup>(36)</sup>を見てみたい。「悟浄歎異」では、悟空が行為者として描かれる。作品冒頭の、悟空が八戒に変化の術を教える場面が「行為」の内実を捉える上では興味深い。佐々木充が指摘するように、「悟浄歎異」における「行為」とは、変化の術を身につけ、成りたいものに自由に姿を変えろということを目指している<sup>(37)</sup>。悟空は変化の術の要諦を次のように語る。

或るものに成り度いといふ気持が、此の上無く純粹に、此の上無く強烈であれば、<sup>つひ</sup>竟には其のものに成れる。成れないのは、まだその気持が其処迄至つてゐないからだ。法術の修業とは、斯くの如く己の気持を純一無垢、且つ強烈なものに統一する法を学ぶに在る。<sup>(38)</sup>

すなわち「現にあるおのれを否定してある他の存在に化すことを、純粹かつ、強烈に望む」<sup>(39)</sup>ことが変化の術には必要なのである。この点を踏まえると、その後成立した「悟浄出世」における「行為」の特質も見えてくる。「行為」とは、具体的に三蔵法師のために体を動かして働くということだけでは足りず、実存的懷疑を突き詰めた末に、「我」への執着を乗り越えることまでを含意していよう。つまり、実存的懷疑を捨てて「行為」せよという観音菩薩の声は、それまでの悟浄に根本的な変革を迫るものなのである。このような観音菩薩の声は、それまでの分析的な思考によって自らの枠組みに落とし込むことができないという点において、まさに「他者」との出会いと解することができるだろう。

「どうも腑に落ちない」<sup>(40)</sup>と述べる悟浄は、このような衝撃的な出会いの意味をすぐには理解しきれていないようである。だが、そのように述べながらも、悟浄が観音菩薩の言葉を受け入れるという態度にこそ注目したい。この態度は、「雞」に見られた「我」に回収できない「他者」を受け入れる態度と同質のものと解すべきであろう。

## おわりに

本稿は、中島研究に作中に描かれる実存的懷疑を読み解こうとするものと、中島の植民地体験を議論しようとするものとの二つの方向が存在することを指摘した上で、両者を架橋する理解の方法を探った。本稿は、両者を架橋する視座として「他者」を取り上げ、中島文学に見られる様々な「他者」の位相を分析した。中島文学を「他者」という視座から読むことで、中島研究は統一的な視座を獲得できるのではないかと。

第1節では、「狼疾記」に着目することで、中島文学における実存的懷疑は「他者」を疎外することにより成立することを見た。第2節、第3節は、植民地を描いた作品を取り上

げ、中島文学の実存的懐疑と「他者」の関わりを考察した。「虎狩」では実存的懐疑に回収される趙の表象を、「雞」では実存的懐疑に回収されないマルクープの表象を見た。第4節では、「悟浄出世」を取り上げ、実存的懐疑に囚われた悟浄が、観音菩薩という「他者」に出会うことを通し、「行為」へと開かれていくさまを考察した。「他者」は実存的懐疑を乗り越えることへとつながっていく。本稿においては、一貫して「他者」からの理解を試みることで、植民地を描いた作品と中島文学の実存的懐疑を共に捉えようとした。このように、中島文学における「他者」に着目することが、「実存的懐疑」と「植民地体験」に注目する二つの研究方向を架橋する一つの方法であると考えられる。

今後は、上記のように中島の内面と外面と統一的に理解しようとする議論を踏まえて、中島文学における「実存的懐疑」と「植民地体験」を昭和10年代というより広い時代の中で位置づけていくことが重要となるだろう<sup>(41)</sup>。さらには、それを受けて中島の戦争に対する向き合い方も考える必要がある<sup>(42)</sup>。今後の課題としたい。

#### [注]

- (1) 中村光夫「中島敦論」『中村光夫全集』第5巻、筑摩書房、1972年4月、486-498頁。『中村光夫全集』第5巻、582頁によれば、同人雑誌『批評』（1943年3・4月合併号）に「青春と教養——中島敦について」として発表されたとあるものの、筆者には確認できていない。確認できるのは、『桃源』第3号（1947年4月）の14-25頁に同一標題で再録されている文章である。中島敦に関する最初期の論考である同稿では、中村は、「中島の文学の基調は旧家に生れてその血の弱さを判つきりと意識した鋭敏な青年の苦悩である。彼の制作はすべてこの苦悩を歌ひ切らうとする必死の願ひの具現であつた」と述べている（引用は『中村光夫全集』第5巻、491頁。また、旧字体は新字体に改めた）。
- (2) 勝又浩『我を求めて——作家論集』講談社、1978年11月。初出は「我を求めて——中島敦による私小説論の試み」（第17回群像新人文賞当選作）『群像』29巻6号、1974年6月、170-196頁。勝又は中島の苦悩を「悟浄出世」における悟浄の苦悩と重ねて語るところからこの文章を書きおこしている。ここには、作品中に表現された「実存的懐疑」を生身の中島のそれと重ねて語ろうとする態度が明確に見てとれる。
- (3) 川村湊『アジアという鏡——極東の近代 川村湊評論集』（昭和のクリティック）、思潮社、1989年5月。川村は本書で、関東大震災の起きた年である1923年の朝鮮半島を舞台とした「巡査の居る風景」と、大連を舞台とした「D市七月絨景（1）」を、「外地」を描いた文学として論じている。
- (4) 木村一信「中島敦の〈南洋行〉——新たな己への認識」『昭和作家の〈南洋行〉』世界思想社、2004年4月、48-56頁。初出は「南洋行あらたな認識との出会い」、勝又浩・木村一信編『昭和作家のクロノトポス 中島敦』双文社出版、1994年11月、47-57頁。
- (5) 杉岡歩美「中島敦〈南洋もの〉考——〈南洋〉表象と「作家」イメージ」『文学・語学』第210

- 号, 全国大学国語国文学会, 2014年8月, 14-25頁。また, 杉岡には, ほかに中島文学を南洋体験から読む論文として「中島敦《環礁》論——視座としての「真昼」」(『同志社国文学』第77号, 2012年12月, 70-84頁) などがある。
- (6) 西原大輔「中島敦「李陵」「弟子」と南洋植民地」『比較文学研究』第86号, 2005年11月, 5-20頁。西原の議論は, 中島の「実存的懐疑」と「植民地体験」を統一的に理解するという本稿の目的に照らして参考になる部分も多い。本論文の西原の議論は, 「李陵」「弟子」における人物造形を中島の南洋体験から考えるというものであり, 本稿とは異なった方法で, 中島の植民地体験を中島文学全体の中で捉えようとする。
- (7) 三浦徳高「中島敦研究の課題——懊悩する自我と同時代への眼差し」『国学院大学大学院文学研究科論集』第41号, 2014年3月, 33-41頁。
- (8) 同上, 39頁。
- (9) 同上, 39頁。
- (10) 「かめれおん日記」とともに「過去帳」の総題のもとにくられる。初出は『南島譚』(今日の問題社, 1942年11月), 266-310頁。
- (11) 通積は「その人が一本の指を養うことだけして, その肩や背を忘れて養うことを知らなければ, それは疾める狼のように, 自らかえりみることの出来ない人とされるであろう」。書き下し文と通積は, 内野熊一郎『孟子』(新釈漢文大系第4巻, 明治書院, 1962年6月), 402-403頁によった。また, 書き下し文中の旧字体は新字体に改め, ルビは省いた。
- (12) 佐々木充『中島敦の文学』近代の文学10, 桜楓社, 1973年6月, 82頁。また, 佐々木が本書において「少なくとも, いわゆる戦後派の文学が, 中島の不安や懼れを共にした人達の文学であったことは疑いようがない」(83頁), 「中島の文学は, 外形的には鷗外・芥川に似て, その内実はまったく新しい, いわば次代の戦後派文学と同じ課題を包懐するという, 独自の存在たりえたのである」(85頁) と述べ, 中島文学と戦後文学には共通する問題意識があったと捉えていることは示唆的である。
- (13) 『中島敦全集』1, 筑摩書房, 2001年10月, 408-409頁。傍点は原文。『全集』からの引用では, 旧字体は新字体に改め, 本稿が横書きであることに鑑みて, 踊り字のうちの「くの字点」は仮名に直した。また, 『全集』を参考に, 中島本人が付したとされるルビのみを本文には反映させた。
- (14) 同上, 405-406頁。
- (15) 同上, 413-414頁。
- (16) 本作品は, 1934年4月30日締め切りの『中央公論』の「原稿募集」に応募したものであるが, 誌上には掲載されなかった。したがって, 1934年4月末までには成立していたと考えられる。初出は, 『光と風と夢』(筑摩書房, 1942年7月), 99-150頁。
- (17) 『中島敦全集』1, 76-77頁。
- (18) 同上, 82頁。
- (19) 同上, 82頁。
- (20) 同上, 83頁。
- (21) 同上, 85頁。
- (22) 同上, 86-87頁。

- (23) 「幸福」「夫婦」とともに「南島譚」という総題が付されている。初出は前掲『南島譚』30-47頁。1942年8月下旬には脱稿と推定されている。
- (24) 『中島敦全集』1, 244頁。
- (25) 同上, 247頁。
- (26) 同上, 251頁。
- (27) 「悟浄出世」と「悟浄歎異」の末尾には、「わが『西遊記』の中」と記されていることから連作とされる。初出は、前掲『南島譚』129-168頁。
- (28) この観点からの代表的な研究は、前掲「我を求めて——中島敦と私小説」である。
- (29) この観点からの近年の代表的な研究は、山下真史『中島敦とその時代』（双文社出版、2009年12月）である。山下は、戦争との関係で「悟浄出世」を論じる。山下は、1933年から35年にかけてのマルクス主義の崩壊により、規範が喪われたことで、各人が規範をつくる必要性に直面し、「自意識過剰」の文学が生まれたとし、「我が西遊記」をその流れの中に位置づける。山下によれば、「悟浄歎異」には当時の戦記文学と同様の志向が見られるものの、「悟浄出世」によって、「戦争の魔力を相対化する視点」（同書120頁）の導入が図られているとする。
- (30) この観点からの代表的な研究は、前掲『中島敦の文学』である。佐々木は同書所収『「悟浄出世」——その構造』において、流沙河の底の妖怪が語る思想の典拠を詳細に研究している。一方で、佐々木は同書所収『「悟浄出世」——その志向』では、中島「我が西遊記」と田中英光（1913-49）の『我が西遊記』（櫻井書店、1944年6月）を対比的に論じることで、戦争という時局を中島論にもちこむことに成功している。佐々木は、「文化の創造者・古典の作者たちを集め、その間を精神の描写である悟浄が遍歴するという方法の基底には、太平洋戦争における、中島の危機意識がよこたわっていたことは間違いない」（同書243頁）と述べる。したがって、同書は戦争とのかわりの中から本作品を読もうとする研究も含んでいる。
- (31) 『中島敦全集』1, 311頁。
- (32) 同上, 311-312頁。
- (33) 同上, 330-331頁。
- (34) 同上, 332-333頁。
- (35) 同上, 333頁。
- (36) 初出は、前掲『南島譚』169-194頁。脱稿の時期は議論があるものの、前掲『中島敦とその時代』や、前掲『中島敦の文学』などでは、「悟浄出世」より3年ほど早い1939年に脱稿したと推定している。
- (37) 前掲『中島敦の文学』101頁。
- (38) 『中島敦全集』1, 340頁。
- (39) 前掲『中島敦の文学』101頁。
- (40) 『中島敦全集』1, 335頁。
- (41) 前掲『中島敦とその時代』では、小林秀雄（1902-83）や日本浪漫派との関係の中で中島文学における「実存的懐疑」を捉えようとする記述が見える。また、前掲「中島敦研究の課題——懐悩する自我と同時代への眼差し」においても、生身の中島と作中人物の同一視を超えた先に、中

島文学を昭和 10 年代の文学として位置づけることの重要性が述べられている。本稿も中島文学を「我」から読む姿勢の相対化を経て、その先に中島文学を広く昭和 10 年代の思潮の中で考察すべきだという問題意識には同意を示したい。

- (42) 中島文学と戦争との関係をいかに評価するかに関しては、考察する時期や対象、または論者によって肯定的な研究も否定的な研究も見られる。今後求められるのは、これまでの具体的な作品研究によって示された知見を基礎に、遺作となった「章魚木の下で」において示された芸術観や、中島文学に通底する実存的懐疑といった観念を踏まえて、個々の研究を総合し、時代との関連で中島文学と戦争との関係を考えていく態度だと思われる。